

序論

みなさん。おはようございます。しばらくヨハネの手紙第一から語ってきましたが、前回、キリの良いところまでお話ししましたので、少しお休みして、今朝は別のところからお話ししようと思います。第一ヨハネの続きは、また折を見て再開したいと思います。

最初に、このリストを見てください。

ある年代の人々の特徴をとらえて、世間では「〇〇世代」と呼ぶ表現が、これだけあるんですね。みなさんはどの世代に属していますか？

団塊世代	: 1947~49 年生まれ
新人類世代	: 1960 年代生まれ
バブル世代	: 1965~1969 年生まれ
団塊ジュニア世代	: 1971~72 年生まれ
就職氷河期世代	: 1971~84 年生まれ
ミレニアル世代	: 1980~90 年代前半生まれ
ゆとり世代	: 1987~2004 年生まれ
Z世代	: 1995~2010 年生まれ

神はリセットをしない

ここには含まれていないですが、「リセット世代」というものをご存知でしょうか？平成9(1997)年度の新入社員につけられたあだ名ということです。リセットというのは、一旦なにもかもご破算にして、最初からやり直すことです。「リセット世代」というのは、自分の気に入らない結果をすぐにリセットできてしまうテレビゲームに親しんだ世代でさうです。そして、まるでゲームのように職業や人間関係のような重要なことも、リセットしてしまおうという感覚を持っている世代だということです。

私たちの信じている神様は、リセット世代ではありません(笑)。それは、今朝のみことばを読めば分かります。神様は、この世界をそれはそれは心を込めて、良いものに造ってくださいました。私たち人間を、なんとご自分のかたちに似せてお造りになるほどに、愛情を注ぎ、豊かな交わりを持とうとしてくださいました。しかし、人が「罪」を犯しました。この世界にも、その「罪」の影響が入り込みました。せっかく神が良く造ってくださった世界も台無しになってしまいました。

もう嫌だ、一からやり直そう。私たちなら、すぐにでもリセットボタンに手が伸びたことでしょう。しかし、神様はそういうやり方はなさいませんでした。これが、今日、お話ししたいことです。

神の国のたとえ

さて、今日のこの麦と独麦のたとえですが、イエスさまはこのたとえによって、何を教えようとしておられたのでしょうか？それが「天の御国」についてであるということは、イエス様の「天の御国は次のようにたとえられます」という言葉から分かります。説教題はここで使われている「天の御国」という表現ではなくて、「神の国」という言葉を使いました。これらは同じことを指しています。マタイの福音書では、「神の国」が「天の御国」と言い換えられています。それは、ユダヤ人たちが、神様の聖なる御名を軽々しく口にすることを恐れて、「神」という言葉さえも不必要に口にすることを憚(はばか)っていたからです。聖書が「神の国」とか、「天の御国」という言葉で示しているのは、「神さまのご支配」です。ここで使われている「国」という言葉は、「王国 (kingdom)」という意味の言葉です。神様を王としていただく、「神様の王国 (Kingdom)」 = 「神様が治めておられるところ」、「神様のご支配」、それが「神の国」であり「天の御国」です。

聖書において、「神の国」はとても重要な概念です。イエスさまは、「時が満ち、神の国が近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と言って宣教を開始されました。そして折に触れて「神の国」についてお語りになっています。イエス様の福音宣教は、「神の国」を宣べ伝えることでした。聖書学者たちは、口をそろえてイエス様の教えの中心は「神の国」であったと言っています。

今朝の、マタイ 13 章は、この重要な「神の国」について、7つのたとえをもって説明しています。まずは、それを整理しながら概観しましょう。

マタイ 13 章の構造

7つのたとえは、次のようなものです。①種まきのたとえ (1—17 節)。最近も、森田先生が語ってくださっていましたので、今日は詳しくは述べませんが、道端、岩地、茨の間、良い地の 4 種類の土地に蒔かれた種のたとえも、実は「神の国」についてのたとえとなっています。この例えの解き明かしが、(18-23 節) でなされていますが、解き明かしをしていくのに際して、イエス様がこう言われてています。11 節「あなたがたは天の御国の奥義を知ることが許されています」。

2つ目のたとえが、(24-30 節) の②麦と毒麦のたとえです。このたとえの解説は、跳んで (36-43 節) のところで語られます。マタイ 13 章でイエスさまが解き明かしまでなされたのは、最初の種まきのたとえと、この麦と毒麦のたとえの 2つだけです。

そして3つ目のたとえは、③からし種のたとえ (31-32 節) です。それに直ぐに続けて (33-35 節) に4つめの④パン種のたとえが語られています。この二つの短いたとえは内容的によく似ています。同じといってもよいでしょう。2つでワンセットとなっています。

同じようなことがは、5つ目の⑤畑にかくされた宝のたとえ (44 節) と、(45-46 節) の⑥高価な真珠のたとえにも見られます。

そして最後に、⑦網いっぱい魚のたとえ (47-50 節) がつづきます。

麦と毒麦のたとえ

麦と毒麦のたとえから見ていきましょう。イエス様ご自身が解説をしてくださっていますので、たとえが何を表しているのかは明確です。ある人が自分の畑に、良い種を蒔きました。ところがその畑に、敵がやって来て毒麦を蒔いてしまいます。畑は世界を表し、良い種は「御国の子ら」、毒麦は「悪い者の子ら」と書かれています。そして良い種を蒔いたのは、「人の子」=イエス様であり、毒麦を蒔いた「敵」は悪魔のことです。そうすると、畑の主人は神様であると考えられます。畑に毒麦が目を出したとき、しもべたちが主人のところに、どうしたらよいかと相談に行きました。

38 節のイエスさまの言葉によれば、「畑」は「世界」のことです。それなら、これが「天の御国」のたとえであるとはどういう意味でしょうか？ 思い出してください。「天の御国」が意味するのは、「神様のご支配」です。「神の国」、そして特に「天の御国」という言葉から、私たちはついパラダイスつまり「天」に存在する楽園をイメージしてしまうと思うのですが、そうではないんですね。これは、この世界に対する神さまのご支配の物語です。

24 節でイエスさまは、「天の御国は次のようにたとえられます。」と言われました。この部分のギリシャ語は、実は「次のようにされている」とも訳すことができます。神のご支配のもとにあった畑が、敵の思うがままにされてしまっている。良い麦だけでなく悪い毒麦も混ざってしまっている。それが、私たちが生きているこの「世界」の現実です。なぜ神様はそれをお許しになられたのか、何故敵の攻撃を防ぐことができなかったのか、それは分かりません。それはこのたとえのポイントではありません。このたとえ話の中心点は、主人がこの畑をどのように扱ったのかという点にあります。

畑の主人は、しもべに、収穫まで麦も毒麦も両方とも育つままにしておくようにと命じます。それは収穫の頃になれば、麦と毒麦とがはっきり区別がつくようになるからです。そうすれば、ただの一本も、良い麦が捨てられてしまうことはないはずだという考えでした。畑の主人は、自分が植えた良い麦を、ただ

の一本でも、蔑ろにされるような方ではありません。

麦と毒麦のたとえにつづく2つのたとえ

麦と毒麦のたとえに続いて、2つの短いたとえが語られます。①からしだねと、②パン種のたとえです。「天の御国はからし種に似ています。人はそれを取って畑にまきます。どんな種よりも小さいのですが、成長すると、どの野菜よりも大きくなって木となり、空の鳥が来て、その枝に巣をつくるようになります。」「天の御国はパン種に似ています。女の人がそれを取って三サトンの小麦粉に混ぜると、全体がふくらみます。」

この2つのたとえには共通点がいくつかあります。からし種もパン種も、どちらも小さいと思われています。しかし、そこにはいのちが含まれています。そして、大きく成長したり、増殖して大きく膨らんだりします。神様のご支配、神の力は、この世にあって大きく侮られています。世の人々はそれを過小評価し、小さなものと考えています。しかし、そこにはいのちがあります。「十字架のことばは、滅びる者たちには愚かであっても、救われる私たちには神の力です。」(Iコリント1:18) 宣教の言葉の愚かです。世はそれに注目しません。しかし、みことばには人を生かす力があり、人を変える力があります。そうやって、神のご支配は広がっていきました。イエス・キリストを信じる群れが起こり、教会が生まれ、全世界に広がってきたのです。この2つのたとえで強調されているのは、神の国の「成長」、「拡大」です。

2つのたとえには、もう一つ共通点があります。悪を象徴する言葉です。「空の鳥」と「パン種」がそれにあたります。どちらも聖書の他の箇所であまり良い意味に使われない言葉です。「鳥」は種まきのたとえでは悪い者、悪魔を象徴しています。また、「パン種」は、「罪」を象徴しています。天の御国が大きく成長すると、必ず悪の攻撃があります。どこからともなく鳥がやって来て、住みつこうとします。パリサイ人のパン種には気をつけなければなりません。

麦と毒麦のたとえの解説につづく2つのたとえ

さて、麦と毒麦のたとえの「解説」が(36-43節)で語られていきます。解き明かしなので、内容はたとえの部分と重複しています。たとえで隠されていたことが、ここでは明らかとなっており、意味がクリアになっています。

しかし、たとえと解説では、解説の方がより収穫(すなわち世の終わりのとき)が意識されています。たとえでは、主人の主な関心は、これからどのように育てるかに向けられています。たとえの解説では、収穫の時、世の終わりに何が起こるかが詳しく語られています。毒麦は、集められて火で焼かれます。では、良い麦は、どうなるのでしょうか？

それが43節に記されています。「そのとき、正しい人たちは彼らの父の御国で太陽のように輝きます。」山の上で栄光の御姿になられた時のイエス様のように、顔が太陽のように輝きます。私たちがまた栄光のからだに変えられるということです。信じられないほどの恵み、信じられないほどの神様の素晴らしいご計画がここにあります。

麦と毒麦のたとえの解説につづく2つのたとえ

麦と毒麦のたとえに続いて、2つの短いたとえが語られます。①畑に隠された宝と②高価な真珠のたとえです。この2つのたとえもセットで、同じ内容を示しています。

畑に隠された宝とは？それを見つけた人とは誰のことを指しているのでしょうか？このたとえだけを取り出して読むなら、天の御国が畑に隠された宝で、私たち人間がそれを見つける物語のように解釈しが

ちです。

しかし、マタイ13章にあるたとえば、種まきから始まり、種まきから成長そして収穫へと向かう大きな流れを持っていることを考慮するならば、宝や真珠を見つけた人とは父なる神で、隠された宝とは良い麦である私たちの事と考えるのが妥当です。収穫の日、私たちはもはや、良い麦にとどまりません。「私たちの父の御国で太陽のように輝く存在」です。神様はそれほどまでに、私たちのことを喜んでくださるのです。その喜びのために、宝である私たちを買うために、持っている物すべてを売り払うお方なのです。私たちのために、神は御子イエス・キリストの血潮という、尊い犠牲を支払われました。たった一つの宝のために、主は畑ごと買われるお方＝世界ごと贖われるお方です。ただ一つの真珠のために、すべてを差し出されるお方です。

網いっぱいの魚のたとえ

最後のあらゆる種類の魚を集める網のたとえをもって、マタイ13章の天の御国のたとえは終わります。このたとえで語られているのは、世の終わりのときのさばきです。網によって集められたあらゆる種類の魚が、良いものと悪いものにふり分けられています。

まとめ

7つのたとえについて、ザッとですが確認してきました。内容が盛りだくさんだったかもしれません。最後に私たちは、この御言葉からどんなことを学んだら良いのか纏めたいと思っております。

1) 主のあわれみは尽きることがない。

「実に、私たちは滅び失せなかった。主のあわれみが尽きないからだ。それは朝ごとに新しい。『あなたの真実は大偉大です。主こそ、私への割り当てです』と私のたましいは言う。それゆえ、私は主を待ち望む。」哀歌3：22-24

そもそも、毒麦が混入した時点で、リセットしてしまっても何の問題もありませんでした。罪を犯した私たち人間は、たとえ滅ぼしつくされても文句の言えない存在です。しかし、主はそうはなさらなかった。哀歌のみことばは、それを主のあわれみの故であると語っています。

神は世界をリセットされませんでした。リセットという行為には、愛がありません。たしょうなりとも愛着のあるものに対しては心苦しく思うものです。主は、私たちを愛してくださっているがゆえに、リセットではなく、救済の道を用意してくださいました。御子イエス・キリストという代価まで払って、私たちのために。このお方が、私たちの主です。

2) 主はご自分の民を特別に扱われる。

歴史を通じて、神様はご自分の民を守り、神が真実なお方であることを示してこられました。旧約聖書では、イスラエルの民をエジプトの圧政から救い出し、主こそが生ける真の神であることを周囲の国々に知らしめました。他にも数多くの証言があります。

新約聖書では、教会が誕生し、世界に広がるほどの成長をとげました。教会は内に、外にある危険にさらされながらも、2000年にわたって存続しています。

旧約でも新約でも、どんなに世界が悪くなり、神の民が墮落しても、主は必ず「残りの者」を起こしてくださり、主に立ち返る者を与えてくださいました。神の祝福と救いの道が閉ざされることのないようにしておられます。

3) 神のご支配は、この世界で実現する。

今日は「神の国のたとえ」について見て参りました。マタイは「天の御国」という表現を使っていますが、麦と毒麦のたとえにおいて「畑」が現わしていたのは、天の国ではなく、この世界でした。神の国とは、神さまが治めておられる、神のご支配のことです。もちろん、「天」には、神様の完全なご支配が実現していますから、神の国には天の御国も含まれます。しかし、今日のたとえで扱われていたのは、この世界における神のご支配でした。

終りの日というのは、私たちの生きているこの世界にも、神さまの完全なご支配が現れる日です。それは再臨の主イエス・キリストが、私たちのところに来てくださることによって実現します。聖書には、死後、神様の懷に引き上げられてそこで平安のうちに過ごすということも語られています、黙示録には天の祝宴に招かれるともあります。しかし、聖書が語る世の終わりにおいて、非常に際立っているのは、神が私たちのところに来てくださるということです。私たちが生きているこの地上の現実には、神が介入してくださるということです。終わりの日には、この地上に神さまが完全なご支配をもって臨んでくださるのです。

これは改めて考えると、ものすごいことです。でも、すでに神は私たちのところに1度来てくださいました。イエス・キリストはこの世に人となってお生まれくださいました。また、主を信じる私たちには御霊が与えられています。インマヌエルの主は既に私たちと共にいてくださいます。そして、終わりの日には、顔と顔をあわせるほどにはっきりと、より近く私たちのところに、主は来られ、ともにいてくださるのです。

4) 神のご支配は、今もすでにある

世を見ればいたるところに「悪」があり、「悪」が栄えているのを目の当たりにします。

「神の国」の前味である教会の中にも、決して理想的とは言えない現実があります。そういう現実を目にすることは、私たちの心を折り、気持ちを沈めさせます。そして、神様がリセットされなかった世界を、勝手に諦めてしまうことがあります。

しかし、すべての事の背後には、神のご支配があります。世が、それをどんなに過小評価しようとも、神がご計画し神がなさることに、逆らうことが得きる人はだれもいません。

「正しい人たちは、彼らの父の御国で太陽のように輝きます。」と、良い麦にそのようにしてくださる主なる神様の豊かな恵みが、今日もこの教会に、そして私たちに、確かに注がれています。

お祈りしましょう。